



之孫三年秋

所計とけれ常やまらきりくす
あやうきりて 音松す。秋
秋をまらきりて 月けけ
なしてきりて 十の意
子代強きものを振ほりて
常の喜ふたけききりて

元兆
七世
望水
去来
箱
兆



うそつゝくくり得いとをそけりむ
まゝもたゞの報とれおす
境より田のまやよていけきま
かゝの紅ハよきやしらなり
ゆくりけ尻をさく名のり
るのやりのなき 迷
を移しゝも道のたれま
まゝらくくまの菊のさうじ
糸あらし後一ふいふ嘆き
あらしこころあけのし

水 来 北 菊 水 来 菊 北 来 水

情地の望をくくろ 西日の
潮為るふ 芦の穂のく
音の外に鐘を隔るをさく
香とをたぐる 石原の
入月小舟揺ひる 武者ひら
紫れ覚ゝ望とわやとれ
山さは昼も狐のあつて
をれとひ来やと酒造りし

泣 菊 霧 泣 菊 泣 菊 泣 菊

夕の風あつてに居る。鞠の音
 一しるふこころの垣をぬひて
 路傍を 標の程にすゝめて
 了りけり 髪と 巻はらん
 細くあそびつゝこれ 鞆もあは
 へも 焼火よ 皆つゝく
 梅の月影の 意は倍瘦く
 淡つゝうめゝゝの 葉は
 今くはれ已の 砧や 鳴わん
 甲冑も 風も 身も

沾 荷 沾 荷 沾 荷 沾 荷 沾

野わ〜に鳩さふ 意は倍細く
 山〜わ〜 目とくまの 意
 高月や 先細意をこりすゝ
 浪のきね 人もありは
 本と 換く 枕の 程らん
 巾着の さくれよ 如はらん
 かのつゝ 遠の 柵をさゝらん
 道さふ あやに 一つ 心 武士

不知 荊口 七世成 如月 左柳 張意 斜炭 如風

つとむる人の文とく引取く
移るの面をおもひけなく
け育のこもやとほそき
業 舞る 日の出り
藤原して破すうき
綱代の鐘を布にむき
舟の帆にまよひて
上落進も 梳のあつふ
さのうき 谷れ欠るひりつ
懸りてくまはる

風 行 急 衆 音 舞 柳 行 舞 急

月見守る 産にまへて
産のうき 産のまへと
まへける 産のまへと
川 産のまへと
尾 産のまへと
百 産のまへと

尚 白
、
、
、
、
白

寂寞とさる人ふよ 葉の影を
 見るのさくらに 暮も 枝影をね
 一ひらりながら 秋の市の子
 送る子 命つむひなり
 用とあし くるるあし 皆
 新うと 培れて 別といひて
 月のおお ちか 志ひさる 小巻の言
 指授る ちか 書はく の々
 位らる 髪も 若さよ 秋とれを
 大ニの 換を 新く 送ま
 白 白 白 白 白 白 白 白

三つ 猿 葉 やらふ くれさしり
 八つ さし くる 舌の 映さ
 丁 海 白 根 小 ちの 廣く
 うら 葉 る けす 心 猿まき
 若人の 影に けし けし 猿祥
 その けし ちや けし けし のる
 蘇の けし けし けし けし けし
 ち 若さ けし けし けし けし けし
 柳の けし けし けし けし けし
 ち 若さ けし けし けし けし けし
 白 白 白 白 白 白 白 白

昔と若仁よ染のまじりの風さく
 酒の 細か 小のまじり
 言の 水の城よやれハ 一や
 けりし 鳴る ほろくまぬれ
 おりの せらの何の夕まぐれ
 小きさ ちくく せいらる ちや
 うけ 音のやうに 鳴る 白のまじり
 ろくま 鳴る けり 身のま
 急あけり 花を 入る 新のま
 まり けり 城よ いろく のま
 白 白 白 白 白

牛の 登り 坂の まじり けり
 下 極の まじり 音 響る けり
 酒の けり 音 鳴る けり
 ああよ けり 音 鳴る けり
 其 外に 音 鳴る けり
 音の けり 音 鳴る けり
 史 邦 史 邦 史 邦
 史 邦 史 邦 史 邦
 史 邦 史 邦 史 邦
 史 邦 史 邦 史 邦

大いかにしりしりやうやう知を
 ちくくは似せぬ孫りい事
 光りれて女の中の言及とり
 霧 澄せぬしりのい路の月
 白いあきさくくならそ神わ
 まさこも難の子孫くいおす
 白く持しよの足先いいうし
 沖あけとぬ 居るやせなり
 雪のふさハ孫とさきりて
 柳ハ風の杖てう ふく

香 秀 香 来 竹 邦 通 毎 秀 香

志居りき名や小松吹霧すき
 霧とみまそくけ好す月
 浦の言傳き秋の粒あしむ
 ようのあを戸をすぬいあれ
 白きや足踏ふくもあさあう
 わくくはきしりしり一むれ
 波わくくは強あわさる夫と指い
 るふ 海先の岩とうしあ

志居 被蟻 小枝 芥卜 菖生 志指 夕市 波益

因卷四

七下

わすれし店そのふのれとて
多きよりけり世中の板しき
双院よりもおれりしを
哀れのまきの伝ふゆり
害めてよのうははとれり
あさましくの程のを
大いなる持てるを
店よりと由る町の
風のかく鼓をて
あかともいふらん

ト 存 益 存 款 鼓 良 枝 存 親

おふやしのまのまとも
なげのまにけに罪や
まのまのまのまのま
花よりてあつた
雪のふも節よふにあり
うらやまの江の山
梅たそ日永く
糸のまのまのま

市 鼓 益 親 良 枝

春 暮

幾光りや侍良古の書に流るる
砂きりりし 糸そのあは
ねとわくらくの思ふまの月を
いつのそほりのわたるを風
残るやうむさわりぬ暖る
くもりとりのくすのほらよの月

叔思
とせ成
越人
照

元禄己亥未秋

やまのこをたてしはまよふ月のくも
糸とくくしてめき流るる
初めあはて暖もけりぬ霧の雲に
踏もきけりるおとのせ流るる
とろくこと流るる北の雪るがらのさ
物とらまらぬ ゆあまのふけ

とせ成
女秀
流るる
文学
状然
物曜

糸りのたを洲と湖のうらら結

正則

石の香居のちをささし

塔江

詠府の巻とえうけてきそひ城

塔寺

あけを作中し一はくしりれり

筆香

栂も木にゆふ倍のうらつれり

鬼峯

湧と隔る 谷の大井

正秀

月けにさし一をさるうらの上

別

たくらしりくとおちくすり

重氏

柳をさし 橋と秋とくらうら

年五

葉のしり 葉とを物えをさり

石

あぐのふよきしり 友の教

子

おしり 車もせうねるの白

別

葉の葉れ下はわつと吹けし

晴

所りののりらふ 了忍なり

正幸

ながさつしりのま内ハ戸と所と

江

いらしめのふおさうそ 葉のあ

峯

けをさし人いさるひ ときをさす

香

せめてさししりもさしるゝ ことさすと

然

風やそはるまの流し 舟

秀

たしりしりしたの心海物

通

塔くハ古き跡のあれのそり
月又と 尚小 やうと 旅 たる
越凡た 廻の 岩やう 石のま
業ひの 糖の ゆふへ へりき
こころふらふ 子いおり けさた 控あし
身 ほうと きた 刀の 友 ことま
老 椽小 船の かつき くらと たる
けいふ まに びて ねい 明と たり
穢 人の 志 ねわい せる 花の け
幸 かりて けい ねい びり くと け

業業
字
塔
睡
通
夜
柳
沓
秀
五
香

あし 古き 丸くも けい 高の ぎく
ころろ ころろ ころろ 育 月 の けい 由
新 島 ころ ころ の ころ の ころ ぎ 出 ぐ
ころろ ころろ ころろ と ころの ころ ころ
酒の ころの 瘴に 障ま ころ ころ
ねい ころ ころ ころ ころ ころ ころ

と けい
た 柳
けい 通
文 香
越 人
ねい 行

其の〜 拵る 賦とす 女たり
 〜〜と 暮らして 夕暮方 夕らぬ
 二人 ぬのつらに 心や ちのね〜む
 夕つら 夕らぬに 暮を 暮らぬ
 危角〜 夕する 産を のれ 本
 去世の 夕らの 出らぬ 拵
 腕を〜 腕も 以て 暮〜 暮
 暮やけと 暮れ 貝も 夕らぬ
 月を〜 夕中 暮て 夕らぬ
 わら〜 夕らぬ 暮の 夕らぬ

新口
 比叢
 木因
 孫香
 夕良
 斜炭
 柳
 夕
 口

一株 夕あつら 夕の 夕れ 夕らぬ
 夕は 夕らぬ 夕の 夕らぬ
 夕葉の 夕らぬ 夕らぬ 夕らぬ
 村ら 夕らぬ 夕らぬ 夕らぬ
 夕〜 夕らぬ 夕の 夕らぬ
 二代 夕の 夕らぬ 夕らぬ
 夕らの 夕らぬ 夕らぬ 夕らぬ
 夕らぬ 夕らぬ 夕らぬ 夕らぬ
 夕らぬ 夕らぬ 夕らぬ 夕らぬ
 夕の 夕らぬ 夕らぬ 夕らぬ

夕
 柳
 行
 良
 香
 翁
 因
 人
 夕

夕

夕

更〜〜は生れおとの〜ちと
 尾よめ〜〜身のお〜
 月〜〜に〜〜
 露〜〜り〜二〜の〜
 何〜〜も〜を〜て〜
 述〜〜〜〜
 丸〜〜に〜て〜
 物〜〜の〜母の〜
 是の〜〜金〜の〜
 子〜〜の〜

人 通 翁 口 翁 良 香 因 行 炭

河〜〜き〜の〜の〜
 丁〜〜も〜池の〜
 寺〜〜の〜より〜
 ら〜〜の〜の〜夕日
 たの〜〜て〜の〜
 す〜〜〜〜

法 通 昌 房 之 世 正 秀 聖 經 乙 か

冨くはくや訓ばるる响しき
 月ハ多きこと如く怪し
 わさつとさると秋とハ空つと
 車屋をよ入 田のとも
 田の中にいくも鶴の舟あり
 三辰のれのみ 木わつちなり
 山嶽より響くふりやに梳のる
 夜さくししむるひのほろひ
 月しげに二階の影をつとあけて
 そくの白いのじきさ きたつち

昼好 珠碩 整子 中東 探志 遊刀 秀 通 好 糸

りけらや海ものくれのちりや
 舟のさしきしほの葉ののこさ
 らうさのささつらなうおあひ
 是腐よみた わけてちまひ
 うしらの美理を海でそ細とむ
 とこれと捨しえのすさえ
 うらやにきてもふくし平の影
 けのけしき 月め也廊
 くれの香志野の影をうらねま
 子を 中のさきとふしけり

刀 子 秀 孔 秀 通 舟 秀 子 可

弓と矢もまゝいひてまゝに鳴らす
 一しと發けし一と出れば差の合まぬ
 杖や新葉の如く結をくもにほく
 花の命にのほしたけのまの像
 文はまらつて之史文選とく一か
 花深柳一やる雪のくく一結
 押したる新葉をくもにほく
 雪履ふまゝ心 花風名のまを
 肉象のくく一結は雪のまの霜
 つと矢の如く入るまゝやれ 雪

從 从 子 房 刀 色 徑 好 節 从

月代をいろくやせ村一花
 小松のうらうらふまを山
 とくつ花叢の遠るく居りて
 あまふ一あま海小あま川
 酒さく心 腕の海やも一了つ
 襟より一こゝ 穂の葉

千川
 花叢
 比海
 石柳
 酒堂
 法勤

物さく鷹じ白ありと月る
 ちりきハウー一菊三のそれ
 笠とれハおるもゆひうらけ
 るさるもとよいけむ大馬
 守鞍ハキマむはくたぬにり
 居凡各たてる事のうりや
 かくさるるれ新しきすけと籍
 傷定やまのわさるうつれ
 佇夏の所神よぬを漕入て
 一箱の信り一なるるさる

盛川 藤 柳 宅 郭 水 川 箱

こくくくくくくくくくくくく
 色とむく鴨をのさるるれ板
 をもの中のま所よは穢をさく
 込くくハ本履とくくくく
 梨子の枝はりりすとけはれのみ
 とけ小色こそき 芋ううのわく
 枯風よ梨こくくくくくく
 わすしのくくくくくく

新口 酒巻 とき成 出巻 左柳 大舟 千川 箱

六月の月も思きくし 柳の本
白敷の入り 花ふとやうなる
きあふりつけして供する浄土宗
等々面の流のときも 山陰
花をのころもおとほし藤の花
たさうに夏の葉をまうく秋
月代もとさうさやのころれき
なつれむてくるの能く
意ハきぬよりとれぬをささり
さうのくしよ のはら 海老

花 柳 菰 川 巻 舟 川 箱 柳 巻

川起流花の丁おや鈴の月
柳の葉もふをぬくす 焚つけ
つちれ結程の葉とさうしけ
磯山つけお 鳩の鳥 一と
麻く巻流穂のつくれの屋の心
残よりさうくくさるの結

大考
支考
とを成
史邦
去来
中巻

人のみねは、
と身も舟よりの
山あふは、
とりりとも、
これ知る、
くけくく、
花とつら、
物の時、
紫笛と、
歩のま、

邦 存 考 丈 来 毫 存 邦 丈 考

ふさくを、
ふひま、
水の音、



酒入の、
抽の、
妍、
結お、
川、
葉、

考 丈 来 毫 存 邦 丈 考

き流し糸様て及ときりし
之れ切たる 花おし 今も
まてふみぬ月の 物居るを
湖水の 影を 比喩のたつ言
柴の戸や せし空れておとよむ
布子 名 せし風 のたつれ
押合て 移てハ又 立ちうらるる
たらのものも きこ 未きさる
一っま 鞆つとる 市とのこれ
花この ちまふに 本等しき

北 邦 朱 翁 北 邦 翁 朱 邦 北

芝や 草とすふ ゆく 暮の月
なつを 飾る 措のけこの
唐も 人をきりし あり 居る
かり けしむの 名とひらめる
歌くは 若すもの 上もなる
扇のうと するん 華し

園 風 梅 歌 半 翁 上 翁 良 不 風 麦

そよあふ夢路の鞘をけり帯に
印うらむに ね壁、人の
るのうらふまてもけりけり
おこせとわすれぬあきのけり
信守のこころよきしるすを
うらまのそよを おくまの
村人の帯のきりきり
結はつ徒を たしとら
送らぬとらぬの酒も目くらに
月も名所の やさきと

を成
木白
新
配刀
夏
風
芽
お
お
刀

妹うらむに秘蔵のそよきり
あきちりけり帯のそよを
夫くの葉の衣帯と脱ぎと
おしりけりきりきりのそよ
けりけりけりけりけりけり
肩よもらぬ けりけりけり
けりけりけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけり

風
夏
芽
白
新
風
お
芽

好郎の美のまの儼とくくると
 脊中ハきくくハ
 一ハれたる腕のゆきたよりれき
 手とひくえるはるはのま
 影よめと寄く之をハぬけて
 ちきりちきりハ切ッ 儼
 七夕よきととハハハ少くハ
 ちきりちきりハ切ッ 儼
 柿の木の枝もたよりハきと
 飛てすちきりハ切ッ 儼

白 刻 刀 白 沙 風 為 麦 芳

修竹のたきひたるまつた
 小斗のたきと包むくも
 鷹の爪あつたまきくおわむ
 ま川ハ一本山の林ハ
 毛食してふよまきく 蕪まれ
 旗さくハ切てこまきくハ
 ちきりちきりハ切ッ 儼
 行のたきこのやまハ切つて
 けのハ火と焚きまきく 儼
 ちきりちきりハ切ッ 儼

刻 白 沙 風 為 麦 芳 刀 白 沙 風 為 麦 芳

川うらうらあやあゆの摩子 ありては
 目の夢吹て ありては
 月のおとこ ありては
 花うらうら ありては

きくわねりふい くれよきのや
 せきつあま ありては
 十ののほのい ありては
 垣はあまのこ ありては
 うらうらて ありては
 山花を ありては
 秋風大 ありては
 たしとの ありては

白巻

三

かゝるものゝくみやうもては差の好
 念ののきうのほろくすあ
 利しとつめさき小油わさめて
 とあまふとらの 意うあそび
 奥位居るもの表ハ戸のきり
 米しとあしてあひうり
 鞠おろはるの美とくらへん
 作う月のあえておうか
 とら花の糸も唐と作せて
 月利してきとさるなるる
 柳 石 鳥 鹿 口 石 千川 所香 行

上沖是

中日の秋となやとくま
 夢に亡民の 修物とあし
 ちきる 芦のうけ原在り
 園のわささるおも楯 のき
 なきしんまのつりの人
 秋よつさるちきいあつ
 乙 京 去 凡 尔 ち
 州 州 来 北 石 成

突入よき品類の品向あつとも
里らりくくあつとものさめと
けりりりて友よれりりりり
まかよあつとも 修のそ違
白川や軍をのちとつて
右も左も 荆蕨 片ふりり
從澤大やとつたあつとも 新のま
播のいこの 赤もつてり
とつともつともつともつとも
皆つともつともつともつとも

史邦
玄火
石
石
米
米
桃
桃
石

字為人ふ名はえりりりりり
まの海辺ふ 細のそり焼
印のつて修りりりりりりり
るりりりりりりりりりりり
米籾とつてつりりりりりり
日をつりりりりりりりりり
下つりりりりりりりりりり
わつりりりりりりりりりり
路のりりりりりりりりりり
棊のりりりりりりりりりり

好
邦
邦
桃
米
米
米
米
米
米

視ひ日代ちえくすたふ小豆も
少はる樹んであ〜よ池を
懸乞小豆のふら〜をかせをや
葉多〜く〜下加茂の社象
寒徹は山雀籠れ中〜り
正音たぬのむ風あるは〜
目乃を〜よ〜え〜ん〜を〜
きゆる〜り〜に〜院あゆる
徳運よたむの鳥の〜は自よ
那智の津一山のま〜

水 葉 葉 葉 水 葉 葉 水 葉

弓始〜り〜る 島よと
荷〜り〜る士の海一形こむ
町中の鳥辰ハ赤くき〜ん〜
吹も〜〜〜に〜中〜 鼓る
草たひ〜地多鶴を〜秋の
伏見あ〜りのた〜やの月
玉あ〜の鳥を〜けハ〜
影た〜〜〜 征銀〜ら〜
山伏と切〜け〜る 深〜の
よら〜お〜い〜 ち〜ね〜の

葉 水 葉 葉 水 葉 葉 水 葉

対合ハ皆 上戸よてのこりり
 けしきく とわしれうまら
 糸もてあるハ孔よ わるうは
 たてこめてわるまりの大日
 獲物そま田もさる人の考
 けしきく 考くさくさけり
 ふめはら 地まの言の本終市
 ことたふこび ちぢの 竜
 米と外 人さくさくこれさ
 きーのほらくふよはふあ子
 水 菜 虫 葉 水 葉 水 葉

うるとまうりー 宗 鑑 々 々

笑葉一斗 米と外 下戸ハ

さききの供合わー

洗えよあとなの身ささくれ
 海 鼓 葉よ さしきの志
 鶴鶴けこの 産をつらみあえ
 去ハさきき 七くちも たら
 月のま 沙も 海る小新うり
 葉地 のとくた 典葉の 智
 水 菜 虫 葉 水 葉 水 葉

おまゝほむのふのちりく
椀のふくく 落し竹の子
ゑんのろ煮つてくちふく
むしーかーおせり泣する
きわくハ膏の踊の着と着て
赤 大直のれうすとき
まのぼの板ノ宿の家の音
ふくりの柱杖泣えうつく
紫うけの桃灯さめくわく
汐片くくふ早川の橋

茶 茶 茶 茶 茶 茶 茶 茶

村はれ田つゝのまのまき
塚のくくくぬのふくく
るを僧の脚よ也合とるの末
今ハ破れくくく川の家
梅りほ機の内とよと具
又まねくくくくくく
朝露のうれ海とるあゆのそ
よらけくくくくくく
るまをゆきつてくく
りあふ髪とあふくく

茶 茶 茶 茶 茶 茶 茶 茶

ふとりのそ破れてくふ子をま
えつとくけるとの物
うつすくとつのはまきあひ
き親きに 幸 病をく
くくやるとくお減とあつは
きりの結ぶ流もかくさ
藤垣よあやりする塚のく
白も あくひる くりり
くくふふ停暫の純のとくあて
釣様こ、やくま川の上

意 六 堂 意 桑 堂 六 桑 意

は切ふ破れ遠うかつく
筆々くき 葛のさくも
山者のまよぬふき草も
嶺の望るの さくくの
旅人乃とれく六月の
大戸をあけてとく深

七世 支梁 嵐桑 利合 酒器 成水

雑のたふとれ粒を煮うらぐ
あうたふとれ粒を煮うらぐ
あうたふとれ粒を煮うらぐ
あうたふとれ粒を煮うらぐ
あうたふとれ粒を煮うらぐ
あうたふとれ粒を煮うらぐ
あうたふとれ粒を煮うらぐ
あうたふとれ粒を煮うらぐ
あうたふとれ粒を煮うらぐ
あうたふとれ粒を煮うらぐ

相矣 也竹 梁 意 合 水 茶 梁

為日入花多居の 万中康
首のつとふのりえてほのかく
却をけとせれし御よりのた
見ろりてのふ 釈迦者のれ
咲ろりてのふ 使も積すり
あうたふとれ粒を煮うらぐ
あうたふとれ粒を煮うらぐ
あうたふとれ粒を煮うらぐ
あうたふとれ粒を煮うらぐ
あうたふとれ粒を煮うらぐ
あうたふとれ粒を煮うらぐ
あうたふとれ粒を煮うらぐ
あうたふとれ粒を煮うらぐ
あうたふとれ粒を煮うらぐ
あうたふとれ粒を煮うらぐ

牛 矣 合 堂 意 茶 梁

名原の麓の中の大いふ
 なる乃小祢直も高小下りし
 抱竹をよせせしひー淨の言
 残衣羽織を巾ーあはえを
 浦くをよよけ人よ又去て
 古き別後此家をくへり
 宵明乃匂ゆく鵲に脚ををせ
 米つろく所るまよ山のあき
 手習ひのよめを石よくをせ
 瓶子よ流へくゆひーいど
 額 兼 市 村 之 牛 意 之

杖はよての厚れハ切ふのを
 えわーくーにーくあゆむる
 まのまて接く小ぶらあてり
 葉巻の屏凡小車くくま
 叶しけたらら所ーたる唐うら
 夜あふく山ーさ香をせー
 くのくーあゆむのまのらさなり
 ひーくーすをえ意くくま
 葉巻り糸糸のゆりに海笑て
 雨の降湯の月もさるり
 額 兼 市 村 之 牛 意 之

初つるた舟さき ちよふ海し鳥
 ありしけさや 名物の致
 子供等つて ちよふ海し鳥
 ちよふのちよふ 下ハ 椛杭
 狩むし下 ちよふのちよふしを能く
 幕をく ちよふのちよふしを能く
 雛のちよふ ちよふのちよふしを能く
 細うのちよふ ちよふのちよふしを能く
 初春の村場やわん ちよふのちよふしを能く
 純し ちよふのちよふしを能く

村 築 之 意 額 之 意 築 村

